

グローバル人材の育成を目指した取り組みについて

前ムンバイ日本人学校 教諭・教務

埼玉県川口市立安行小学校 教諭 福田 由香

キーワード：在外教育施設、ムンバイ、英語教育、国際交流、現地理解

1. はじめに

ムンバイは、インドの西海岸アラビア海に面する場所にあるインド最大の都市である。また、インド国内の商業の中心都市でもある。

本校は、小学部1年生～中学部3年生までが、まるで家族のように生活している。年度ごとに多少の増減はあるが、全校児童生徒数は約30名である。少人数だからこそ可能なこともあれば、もちろん逆に難しいこともある。しかし、マイナス面はみんなで補い合いながら、日々学習に励んでいる。また、少人数である利点を生かした英語教育や国際理解教育、現地理解教育に取り組んでおり、グローバル人材の育成に力を入れている。ここにその取り組みを紹介する。

2. 英語教育について

インドでは、どこへ行っても英語を使用するということもあり、子ども達の英語への関心はとても高い。また、身につけた英語の力を発揮する場を多く設定することで、児童生徒のやる気にもつなげている。

(1) 英会話

ムンバイ日本人学校では、小学部1年生から週に3回英会話の授業を行っている。まずは、①小学部1年生～3年生、②小学部4年生～6年生、③中学部の3つのクラスに分けている。そのクラスをさらに能力別に3つのクラスに分け、1クラス4人程度の少人数で学習に取り組んでいる。また、インド人の英会話講師が各クラスに1人ずつ配置される。そのため、1時間の中で英会話講師と児童生徒の会話量が確保され、英会話の力を伸ばすことができている。そして、次のクラスに上がるだけの力が十分に身についたと判断されれば、随時クラス変更をしていく。このシステムも、児童生徒の意欲になっている。

(2) 英語劇

ムンバイ日本人学校では10月に学習発表会があり、その演目の1つとして英語劇が行われている。英語劇は学習発表会の目玉の1つでもあり、保護者や日本人会の方々も楽しみにしている。台本作成や配役決めは英会話講師が行っている。1学期のうちに台本、配役は決められ、夏休みの間に子供たちは英語のセリフを暗記していく。内容はその年によって異なるが、低学年は「シンデレラ」や「白雪姫」の物語や、インドの文化を紹介するストーリーに取り組んできた。高学年・中学部は、英会話講師のオリジナル脚本に取り組んでいる。必ず一人一役を務め、本番では大きなホールで衣装を着て発表する。よって、どの児童生徒も真剣である。また、英語のクオリティを高めるだけでなく、エンターテインメント性も養われる取り組みである。

(3) グルモハル祭

1学期後半に、いわゆる学校祭である「グルモハル祭」が行われる。縦割りでグループを組み、射的やヨーヨー釣りなどの日本のお祭りの出店を中心にお店を出す。お客さんは保護者や日本人会の方々の他に、現地の学校の子供達を招待して交流を行っている。その現地校の子供達に、ルールなどを説明するのはすべて英語である。そのため、英語の台本を



交流に来た現地の学校の児童

自分のお店に合わせて作り、小学部の子供達も覚える。そしてグルモハル祭当日は、現地校の子ども達と英語でコミュニケーションを図る。お店を楽しんでもらうだけではなく、お互いに自己紹介をするなどし、現地の子と仲を深める機会にもなっている。

(4) 英語を試す校外学習

学校近くのモールやスーパーに行き、買い物をするなどの校外学習に取り組んでいる。

小学部1年生～3年生は家の人から頼まれた物をスーパーで買う「はじめてのおつかい」に出かける。英会話講師が各グループにつき、それぞれの児童の補助を行う。しかし、店員さんとの対応や、合計金額を聞いて支払いをするのは自分である。普段は必ず保護者と一緒に出かけるスーパーで、英会話講師がいるとはいえ、自分だけで買い物をするという経験は、充実感とともに自信をもつことができる活動となっている。

小学部4年生～中学部は、モールにて自分の買い物をする。昼食も自分達でお店を決めて注文をして食べる。また買い物とは別の日に「English Cafe」の活動も行っている。学校近くのコーヒーショップに行き、英語のみで会話をする取り組みである。高学年だからこそできる、高度なスキルを要する活動である。3時間目ごろから出かけていき、昼食を食べて帰って来るといふ、短い活動時間ではあるが、子供たちが楽しみにしている活動である。普段は家族にまかせることも多い店員さんとの会話を、自分で行うことを通して、英語の力を試すだけではなく、生活の中で英語を使っていく姿勢も育てている。

3. 現地理解

ムンバイ日本人学校では、英会話講師の他に、高学年の図工・中学部の美術の授業を担当するインド人講師、7名のインド人スタッフが働いている。よって、児童生徒は普段から現地の人たちとふれ合う機会が多い。さらに、インドならではの文化や習慣・言語にふれることで、インドについての理解を深めている。

(1) インドダンス

昔からインドにある伝統的なダンスと、映画でも有名な Bollywood ダンスがある。その年によってどのようなダンスにするかは、インド人のダンス講師によって決定される。クラブの時間にインド人のダンス講師を招き、小学部3年生以上の児童生徒が習う。インドダンスは学習発表会や、日本語学習者文化祭など、1年を通して様々な場で披露していく。休み時間も踊り、家に帰っても練習に取り組む子がいるほど、インドダンスが好きな児童生徒が多い。

(2) インド体験クラブ

インドには、伝統的な物がたくさんある。インド人の講師と何に取り組んでいくか相談し、毎時間1つ体験していく。例えば神様であるガネーシャの置物を作ったり、伝統的な太鼓の演奏を習ったりした年もあった。また、インドの紅茶といえば「チャイ」であるが、実際に自分たちで作って飲んだこともある。児童生徒に人気だった取り組みの1つに「ヘナ」がある。ヘナは、植物から作った茶色のクリームで、手や足などに体に模様を描いていき、しばらくしてクリームが乾いてはがすと、体に描いた模様が残っているというものである。本来は、結婚式の際に新婦が行うものであるが、ヘナの職人を招いて体験をした年もあった。

(3) インドについて調べる、生活科・総合的な学習の時間

ブロックごとに生活科・総合的な学習の時間に取り組んでいる。各ブロックのテーマは、年度初めに児童生徒と教員で話し合って決めていく。調べ学習を行ったり、実際に体験したりして課題を解決していく。中学部が実際にスラムツアーに参加し、スラムの生活の様子を見学した年もあった。また、ムンバイの「日本人寺」の住職に会いに行き、その活動の内容を調べた年もあった。小学部では、学校のことやインドの衣食住、世界遺産についてなど、自分たちの生活にかかわり



「ヘナ」の体験

のある身近な事柄を調べていく。調べたことは、学習発表に劇にして発表していく。

(4) 朝ヨガ

朝の活動の時間に「ヨガ」に取り組んできた。インド人講師や日本人講師を招いて教えていただき、全校児童生徒はもちろん、教員も一緒に取り組んだ。朝ヨガは、保護者からも好評な活動の1つであった。なぜなら、ムンバイ日本人学校には校庭がないため、児童生徒の運動量を確保するのが難しい。校庭を使用する運動を行う場合は、近くの現地校や広場、サッカー場などを借りて行っている。しかし、普段運動ができる場所は校内にある「ホール」のみである。ホールで行うことができる運動には限りがある。そんな中、少しでも児童生徒が体を動かす機会を増やしたいという思いがあった。朝ヨガは、インドの文化に触れるだけでなく、運動量確保という目的でも、重要な活動であった。また、朝ヨガを行った日は、児童生徒、教員もゆったりとした気持ちになり、落ち着いて授業をスタートさせることができ、心の面から考えてもよい活動であったと考えられる。

(5) 修学旅行・野外活動

ムンバイ日本人学校では、小学部5年生～中学部が修学旅行、小学部1年生～4年生が野外活動として、宿泊学習に出かける。次にそれぞれの活動について述べる。

～修学旅行～

修学旅行は、2泊3日で行われる。インド国内の3カ所を、1年ごとにローテーションで訪れる。その際に、世界遺産等を観光するのはもちろんだが、インドならではの体験にも取り組む。伝統的な技法で描く絵画にチャレンジしたり、その地方に伝わる伝統的なダンスを鑑賞したりしたこともあった。また、インドの代表的な食べ物の一つといえば「タンドリーチキン」であるが、デリーを訪れた年には、タンドリーチキン発祥の店に行ったこともあった。そして、修学旅行ではお土産を各自で購入することができる。その際の値段交渉も、各自で行う。日本では値札がついているため、値段を聞いてさらに交渉することはまずない。しかし、インドではまず値札がない場合があるので、値段の確認から始めるのである。このお店の人とのやりとりも、貴重な体験の1つとなる。

～野外活動～

野外活動は、修学旅行と同じ時期に行われる。しかし小学部1年生～4年生という発達段階を考え、宿泊は1泊2日とし、最後3日目は学校での活動に取り組んでいる。子供たちが住むムンバイ市内は、ビルの数も車の数も多く「都会」である。そこで、バスで2時間程度で行くことができる、自然の多い地域に宿泊する。その際修学旅行と同様に、世界遺産等の観光をしたり、インドならではの体験に取り組んだりする。インドといえば「インディゴブルー」の染め物が有名だが、ひとり、1枚ずつハンカチ染めにチャレンジしたり、インドの重要な日である「デワリ」に使用する飾りを作ったりした。作った物は、野外活動の思い出というだけではなく、インド生活の思い出の1つにもなっている。

4. 終わりに

インドはまだまだ治安や衛生面での不安な部分もあり、児童生徒も自分達の生活を不自由に感じることもあるようだ。しかしインドでなければできない体験や、海外にいるからこそ養うことができることがある。ムンバイ日本人学校ではその「海外にいる・インドにいる・少人数である」という点を生かし、一人ひとりの児童生徒に国際感覚を育むための多くの活動に取り組んでいる。今回記した取り組みの他にも、障害のあるインドの子供たちとの交流・日本語を学習している学生たちとの交流・インドで活躍する日本人や領事館の方の講話など、国際感覚を磨くために次々に手立てを講じている。私が現在勤務している埼玉県では、最重要課題の1つとして「グローバル化に対応する人材の育成」を掲げている。ムンバイ日本人学校で学んだ子供たちが身につけた力は、まさに「グローバル化に対応する」力であり、これからの社会で必ず生かされ、求められると考える。そして、これからの国際社会に羽ばたき、活躍することを期待し、願っている。